

かたりべ128

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより



写真左 関根雲停写「葉形六歌仙」

写真上 奇品栽培等で使用された植木鉢
(原資料・再現資料)

江戸時代のガーデニング事情にグイグイせまります!!

郷土資料館では、来る七月二〇日より第二回収蔵資料展「江戸園芸資料コレクション」を開催します。今回の展示会では、当館が長年にわたり収集してきた園芸書、植物図譜、植物画、浮世絵などを複製版・複製資料も含め一挙に展示公開いたします。

一七世紀半ばから一九世紀後半までの約二〇〇年余、大都市江戸とその周辺地域では、独特の植物栽培・植物観賞文化が展開します。例えば、一七世紀半ば以降の武家屋敷の庭園や寺社境内の庭園では、ツジやサツキ、ツバキなどの植木を栽培し観賞するいわば「地植え園芸」が主流で、武家など身分の高い者たちが担い手の中心でした。ところが一八世紀半ば頃を境として、武家はもろん庶民にまでその担い手が広がり、広い庭園がなくても狭い空間で楽しめる「鉢植え園芸」へと栽培・観賞のあり方が変化していきます。オモトやランなど葉の一部に斑の入ったものや捻れのあるもの等を珍重する奇品の流行は、その典型例と言えるでしょう。

室内から見える庭木に何となく心が癒される…。あるいは部屋の片隅に置かれた一輪挿しの花を眺めると心が和む…。今を生きる私たちも二〇〇年前を生きた江戸時代の人々も、こうした感覚に大きな違いはないと考えます。植物を育てそれを愛でる習慣は、当たり前のように人々の日常に溶け込み、現在に至っているのではないのでしょうか。

今回の展示会では、「地植え園芸」を象徴するものとして一七世紀後半から一八世紀前半にかけて活躍した上駒込村染井（現駒込三・六・七丁目あたり）の植木屋伊藤伊兵衛の業績を取り上げます。そのなかでも植物図譜、植物画の描写と板行にこだわった伊兵衛三之丞・政武父子の思いを明らかにしていきます。一方、「鉢植え園芸」の象徴としては、一九世紀前半に板行された『草木奇品家雄見』、『草木錦葉集』、『金生樹譜別録』という三種の書籍を取り上げます。これらの書籍の成立経緯、記述内容から奇品栽培の実像に迫ります。当館が収蔵する江戸園芸資料が、時を超えて人と植物との関わりを再考する機会となれば幸いです。

（郷土 秋山）

郷土資料館の収蔵庫

旧高松第一保育園の整備・活用

郷土資料館の約一〇万点に及ぶ所蔵資料は、主に館内の収蔵庫、旧第十中学校（千早四丁目、以下旧十中）、京北倉庫（北区堀船二丁目）の三か所に分散して保管しています。このうち、旧十中は、生活資料や図書資料の収蔵庫として一部を利用していましたが、施設の老朽化により取り壊しが決定しており、その跡地には多目的スポーツ施設の整備計画があります。旧十中に収蔵している約二万点の資料は、埼玉県飯能市の区有地に収蔵庫を新たに整備し、移転する計画ですが、継続的な資料の収集や調査、整理、そして展示を行うためには、区内の収蔵施設が不可欠です。

そのため、区内の使われなくなった施設のなかから、二〇一四（平成二六）年



写真① 業者による清掃後、さらに細かい箇所の清掃を行う



写真② 資料収蔵のために組み立てた棚



写真③ 梱包され、運び込まれた資料



写真④ 棚に収蔵された資料

度閉園となった旧高松第一保育園（高松三丁目、以下旧高保）を新たに収蔵庫として整備・活用することになりました。旧十中ほどの収蔵容積はありませんが、所蔵資料を郷土資料館からより近い場所で保管するための一拠点として、二〇一六（平成二八）年度から整備作業を始め、現在も資料の移転、収蔵、棚卸しなどの整理作業が続いています。今回は、その整備・活用の過程をご紹介します。

遮光カーテンの設置を行いました。次に、虫害対策として施設燻蒸（くんじょう噴霧）を行い、その後、水回りの修繕、資料収蔵用の棚の搬入・組み立て（写真②）などの準備を経て、ようやく資料が収蔵できる環境が整備されます。

資料の移動は、学芸員の立ち会いのもと、細心の注意を払って行われます。様々な形状、材質の資料を状態に応じて梱包（写真③）し、移動させることは、大変な労力が必要です。移動した資料は、運搬による破損や紛失等がないか確認をしながら開梱します。資料全体の容積を確かめながら、寄贈者毎、または資料の種類毎にまとめ、棚へと収蔵します（写真④）。収蔵棚は、転倒防止のため固定し、収蔵した資料が飛び出さないよう紐をかけるなどの対策をしています。

収蔵作業が済んだら、それぞれの資料がどの棚に収められているかを把握するた

め、資料番号と収蔵場所をメモし、棚卸しをします。さらにこの資料の情報をデータベースへ反映させることで、今後調査や展示などで資料を出し入れしやすくなり、より資料の活用が円滑になります。

郷土資料館に展示してある資料は、所蔵資料の極々一部であり、その展示もこのような収蔵庫整備、そして資料収蔵という地道で継続的な作業によって成り立っていると云えます。郷土資料館にとって、最も重要な業務の一つなのです。二〇一八（平成三〇）年六月現在、旧高保では移動済み的一部資料の棚卸し作業を行っています。限られた収蔵スペースですが、先述の旧十中にはまだ多くの資料が収蔵されているので、旧高保へ移動させる追加資料を随時選びながら、双方の施設で資料整理を実施していく予定です。

旧十中や旧高保といった廃校、廃園施設を利用した収蔵施設は、耐震構造が不十分であることや雨漏り、空調未設置など、様々な課題があり、必ずしも貴重な文化財である資料の収蔵に適した環境であるとは言えません。収蔵環境の改善、収蔵施設の拡充など、資料保管の課題は山積しており、学芸員は日々その課題と向き合いながら、資料と接しています。

（郷土 岩崎）

二〇一八（平成三〇）年三月二十八日に豊島区立鈴木信太郎記念館が開館いたしました。図らずも信太郎の父政次郎が家族を連れて大塚の地（現在地）に転居した一九一八（大正七）年から満百年にあたる年に開館できたこと、すべての関係者の方々に深く御礼申し上げます。

さて、鈴木信太郎記念館で展示を行っている建築資料は図面資料が中心ですが、図面以外にも貴重な資料を紹介しています。今回取り上げる「建築申請書」（**図1**）は一九二八（昭和三）年の書斎棟増築時に作成されたもので、内容は「申請書」、「委任状」、「仕様書」、「強度計算書」、「付図」から構成されています。「建築申請書」は、建築物が建築基準法や各種規定に適合しているかどうかを工事着工前に審査するための書類で、本資料は一九二七年七月三〇日に巢鴨警察署に提出されています。

まず、「申請書」を見ていくと、敷地と建物の概要は、敷地面積が二〇六坪一合三勺、木造二階建の母屋の面積が四四坪八合三勺、増築する書斎棟及び木造の内玄関部分の面積は三四坪〇合四勺であ



図1 「建築申請書」

り、敷地面は道路より九尺高くなっていると書かれています。様式は「洋風及び日本風」となっており、屋根形状は書斎棟が陸屋根で、木造部分が四寸五分勾配の瓦葺となつています。その他、基礎、軸組、床構造、小屋構造の概略が記載されており、いずれも詳細については「仕様書」を参照するようにと書かれています。「委任状」は、書斎棟増築工事建築出願に関するすべての権限を建築主である鈴木信太郎から設計者の大塚泰を代理人として委任する旨が記されています。

「仕様書」は「通則」から始まり、「仮設工事」、「基礎工事」、「コンクリート工事」、「鉄筋工事」、「木工事」、「瓦工事」、「器具工事」、「左官工事」、「板金工事」、「塗師工事」、「雑工事」の全十二項目にわたる工事の仕様が定められています。

「コンクリート工事」を例に挙げると、第四条で鉄筋コンクリートの配合はセメントの容積一に対して、砂と砂利の合計容積は六を超えてはならないとされており、無筋コンクリートにおいては、セメント一、砂三、砂利六となるように配合が指定されています（**図2**）。その他の工事についても使用する材料、工事の手順等が細かく指定されており、「仕様書」に記載のない件に関しては、監督者に確認を取ったうえで作業を進めるよう記されています。

「強度計算書」は、建物に対して必要なコンクリートの強度を計算によって算

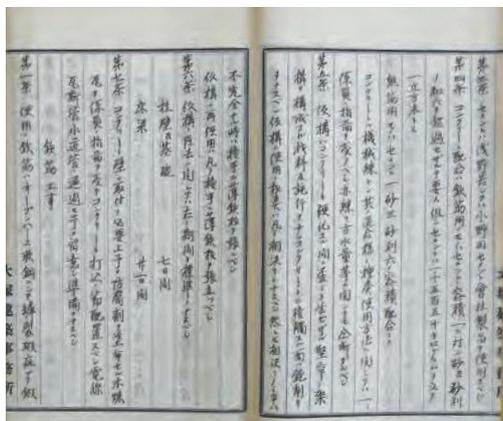


図2 「仕様書」より「コンクリート工事」の頁

出したものです。本書においては、屋根床梁、床梁、柱、基礎の四項目における必要強度の計算がされています。

「付図」は、「平面、立面、内部、床伏等」、「各部詳細（書斎棟立面及び断面詳細図）」、「各部詳細（防火扉、入口扉、仕切窓、便所詳細図）」、「軸部詳細図」の計四枚で、図面の作成日は七月二十八日となっています。「付図」のうち、各部における鉄筋の配筋詳細についての書込みが複数見られ、おそらく「仕様書」の「鉄筋工事」部分との齟齬があったために追記されたものと思われます。

以上の五点からなる「建築申請書」は、竣工届の提出時の他、基礎、各階梁、屋根版の配筋工事を行う際には届出検査を受けるよう指導を受けたうえで、一九二七年八月一日に建築認可が下りています。こうした建築物の建設時における書類が設計図と共に残されていることは稀であり、昭和初期の建築確認申請手続きの様子を窺い知ることができ、貴重な資料であると言えます。興味がありましたら、ぜひ記念館に足をお運びいただき、その他の展示資料と併せてご覧いただければと思います。

皆様のご来館をお待ちしております。
（郷土 木下）

作品を見る読む

12

高島達四郎

《プチ・ジャン》

番外編

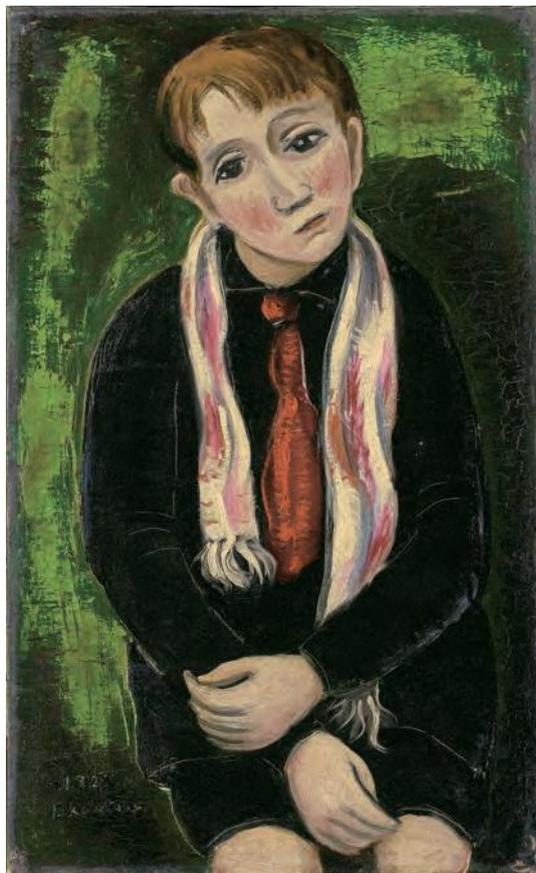


図1 高島達四郎《プチ・ジャン》、1928年
油彩・カンヴァス、52.5×31.5cm
豊島区立鈴木信太郎記念館蔵

之は巴里の空氣が充分に滲み込んだ繪である。

《プチ・ジャン》(図1)に対して語られた文章の一節です。本作は、一九二一(大正一〇)年から渡仏していた高島達四郎(一八九五―一九七六)が一九二八(昭和三年)年にパリで描いた作品です。同年帰国し、二科会第一五回展に出品されました。

池袋モンパルナスに関連する作品を美術分野の収集の中心に置く豊島区には、本作のような異国、それもパリを感じさせる作品は多くありません。今回取り上

げたのは、豊島区立鈴木信太郎記念館が本作を所蔵しているためです。そのため今回は番外編としています。高島はフランス文学者・鈴木信太郎(一八九五―一九七〇)とは幼稚園からの幼なじみです。鈴木信太郎記念館のうち書斎棟竣工時の一九二八年に、高島から鈴木への新築祝いとして贈られた絵なのです。鈴木が精魂を傾けた書斎と書庫を兼ねる一室の定位置―入口上部―に、鈴木存命時のまま架けられています(記念館開館当初は実作が、現在は作品保護のために複製が架けられています)。鈴木は長い時間をと

もに過ごしてきた同作を、まるで自分の子供か守護天使のようだ、と語ります。小首をかしげ頬を紅潮させたこの少年

は、何を思っているのでしょうか。ジャン少年の顔が傾いているだけではなく、鼻筋と目の位置には複数方向からの視点とデフォルメが感じられます。また、真っ赤なネクタイ、彩り豊かなストール、深みのある緑色の背景が、モノトーンの服装と色の対比をみせ、フォーヴィスムの一端を伝えてくれます。フォーヴィスムとは一九〇五年、パリでの展覧会(サロン・ドートノンヌ)の一室が激しい色彩の

絵画でいっぱいになり、野獣(Fauve)の檻の中にいるようだ、と評されたことからそう呼ばれるようになった絵画の動向です。色彩が持つ表現力が特徴とされたフォーヴィスムですが、日本では、形の単純化と絵具の物質性の重視という点で受け入れられたと言えるでしょう。

一九二〇年代にパリに留学し、「一九三〇年協会」というグループを経て、一九三〇(昭和五)年に独立美術協会を立ち上げた作家たちの作品には、こうしたフォーヴィスムの受容例をみるることができます。高島は、里見勝蔵や川口軌外らとともに創立会員の一人で、《プチ・ジャン》は同展の第一回展にも出品され

ました。その後も本作は何度か展覧会に出品されます。高島の意志や周囲からの要望で、幼なじみの鈴木の手書と展覧会場の間を往き来するのです。

冒頭の一節は、鈴木の手書で高島とも懇意にしていたフランス文学者・辰野隆(一八八八―一九六四)によるものです。その文章はこうに続きます。

可愛いジャンよ。何を考へてゐる。何を待つてゐる。早熟な巴里の少年にはあり勝ちな、年齢よりも早い青春の悩みを貴様もそろ／＼悩み始めたのか。それとも、母親の病でも案じてゐるのか。微熱でもあるやうな貴様の頬の桃色を、春景の緑が暗くしてゐるのか。明日は、ロンシヤンの競馬に連れていつてやるから、そんな淋しさうな顔をするなよ。

と云つて慰めてやり度くなる程佳い繪である。ボン・グウの繪であり、落付いた、澄んだ繪である。

「人と繪」『独立美術2 高島達四郎特輯』
独立美術協会編、一九三三年一月
ボン・グウ: Bon Gou, センスがよいという意味のフランス語

本作は、こののち風景画を得意としてゆく高島が、この辰野の評を引き出させるような、人物と深く対峙した描写を見せています。(美術 小林)

衛生と美容の日用品③—贈答品としての固形石鹼—

清潔さを保つために私たちは毎日あらゆるものを洗います。朝、目が覚めれば顔を洗い、外出先から帰れば手洗い。洋服だって食器だって部屋だって、使ったり汚れたりすれば洗います。洗う頻度や方法、何を洗うか、何で洗うかは、時代や流行によって変化していますが、洗うという行為は変わりません。

今回は「何で洗うか」に着目して資料をご紹介します。

■清潔を保つ洗剤と多様化

皆さんのお家の中を見回すと、どんなものが見つけれられるでしょうか。髪や手といった身体に使うシャンプー、ボ



図1 三越ペリカンブークセット
3種22個入

デーソープ、ハンドソープの他に、洗濯用洗剤、食器用洗剤、風呂用洗剤等々。これらの洗剤は、おおよそ石鹼と洗剤（合成洗剤）に分けることができます。

現在私たちが利用している洗剤の国内製造が始まったのは、石鹼は洗濯用の固形石鹼が明治初期に、洗剤が同じく洗濯用で昭和の初期になります。どちらも一般的に使われるようになるのは、それよりもっと後になりますが、主な普及のきっかけは保健衛生の向上のためでした。それ以前は、ムクロジの実の皮や灰汁など、洗浄効果のあるものが使われていたといえます。

第二次世界大戦以降、徐々に石鹼の生産が回復・増加していき、電気洗濯機の普及とともに今度は洗剤が広まります。一九五九（昭和三四）年には衣料用の洗剤の生産高が石鹼を上回りました。

一方で身体用の洗剤は、単に汚れを落とすためだけでなく、肌に優しく、また香りが保たれるといった美容を目的とした効能の向上と、家庭の内風呂普及率の上昇といった要因によって市場が拡大していきます。



図2 三越の熨斗紙「御歳暮」
昭和26年より使用されている包装紙
写真枠外下部に伝票ラベルが添付されている

■贈答用の高級石鹼

図1の資料はペリカン石鹼製の三越のお歳暮の石鹼セットです。三種類の石鹼が綺麗なパッケージで箱詰めされ、「ブーケの香り」と謳われています。

三越の包装紙に包まれており（図2）、包装紙に張り付けられている伝票ラベルには「池袋 三越」の印字と「53.12.2」とスタンプが押されています。三越池袋店が営業していたのは、池袋駅周辺に百貨店が開業し始めた昭和三〇年代の一九五七（昭和三二）年から二〇〇九年までのことですから、スタン



プが「昭和53年12月2日」の購入を示すものとわかります。

この資料が贈られた当時、一九八〇年代頃は、石鹼の市場は半分近くが贈答用の石鹼でした。「石鹼は貰うもの」という認識が広まり、贈答用石鹼の生産のピークでもありました。

現在も日常的に固形石鹼を使う方や、毎年お歳暮を欠かさない方もいらっしゃるかと思います。どちらも「今はすっかりなくなってしまった習慣」ということでは決してありませんが、贈答用として固形石鹼を贈ることが当たり前であった、ちょっと前の生活を語ってくれる資料としてご紹介しました。

（郷土 上田）

2018年度豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ事業予定 (2018年4月～2019年3月)

企画展	豊島区ミュージアム開設イベント第10弾 「鏡の前のくらしー身だしなみの道具ー」(仮題)	10月26日(金)～2月10日(日)
収蔵資料展	第1回「新着！寄贈資料展～教育・戦争・ものづくり～」 第2回「江戸園芸資料コレクション」 第3回(未定)	4月13日(金)～7月8日(日) 7月20日(金)～10月14日(日) 2月22日(金)～5月12日(日)
展示 見どころ解説	常設展示と企画展、収蔵資料展の見どころを、学芸員がわかりやすく解説します。	毎月第4土曜日 14時～40分程度 事前申し込み不要 直接会場へ
庁舎まるごと ミュージアム (3階展示)	美術分野 ①「桂川寛と初期ガリ版制作の頃」 ②「日本近代油彩画 フォーヴィズムの動向ー池袋モンパルナスより前のことー」 ③「池袋モンパルナスと女性たち」(仮題)	①11月9日(木)～6月13日(水) ②6月14日(木)～1月30日(水) ③1月31日(木)～6月12日(水)
	郷土資料分野 ①鈴木信太郎記念館の紹介 ②「明治150年ー豊島区と明治維新ー」 ③(未定)	①5月25日(金)～9月27日(木) ②9月28日(金)～1月24日(木) ③1月25日(金)～5月30日(木)
	文学・マンガ分野 ①「赤い鳥と豊島区」 ②「飛鳥高と豊島区」(仮題) ③(未定)	①4月1日(日)～9月30日(日) ②10月2日(火)～4月1日(月) ③4月2日(火)～9月30日(月)
講座・講演・ 見学会など	第13回 新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館関連事業 「ガリ版版画の世界」 講師：神崎智子氏(謄写版版画作家)	5月19日(土) 午後
	豊島区ミュージアム開設イベント第9弾 「豊島ミュージアム講座」(全4回)	10月13日、10月27日、11月10日、 11月17日 土曜日午後
刊行物	郷土資料館・ミュージアム開設準備だより 「かたりべ」128号～131号	年4回、2,200部、無料頒布 7月・9月・12月・3月刊行予定
	研究紀要「生活と文化」第28号(付・2017年度年報)	3月刊行予定 500部 有償頒布
	企画展図録	10月刊行予定 1,500部 有償頒布
臨時休館・ 年末年始の休館	収蔵資料展の展示替え 企画展の展示替え 年末年始 収蔵資料展の展示替え	7月10日(火)～7月19日(木) 10月16日(火)～10月25日(木) 12月28日(金)～1月4日(金) 2月12日(火)～2月21日(木)

※都合により事業内容や日程を変更する場合があります。

※事業の詳細は、「広報としま」、および郷土資料館ホームページ、ミュージアム開設準備グループのホームページで随時お知らせいたします。

研究紀要『生活と文化』第27号 付・2016年度年報 価格700円 2018年3月発行

※郷土資料館事務所(としま産業振興プラザ7階)・行政情報コーナー(区役所4階)にて頒布

「東京癡兵院での生活」

山本昂伯

「学童集団疎開(七)連続する大空襲、帰る者・行く者・移る者」

青木哲夫



編集後記

「かたりべ」一七八号をお届けいたします。本年度も年四回の発行を予定しておりますので、ご愛読のほどお願い申し上げます。

毎年、年度初めの「かたりべ」には、年間スケジュールを掲載しています。

当館では三種類の「展示」がありまして、本年度は企画展が一回と収蔵資料展が三回、開催を予定しています。ちよつと説明しますと、区の歴史を通史的に展示しているのが常設展です。大きくは展示替えしませんが、ご来館の際にはいつでも見学できます。収蔵資料展は、館蔵の資料からテーマを設けて資料をお披露目する期間限定での展示です。

最後に企画展ですが、この「企画展」、明記はしてありませんが、郷土、美術、文学・マンガの三分野で順番に担当しております。ただし、年に一、二回の開催のため、残念ながら毎年同じ分野の展示は行っておりません。昨年度末に大変ご好評いただきました美術の企画展「アトリエのときへ 10の小宇宙」の会期中には、来館された方より「来年度も美術の展示はやるのか」とのお問い合わせがありました。本年度の企画展は郷土の担当のみとなっております。三分野の展示の違いや特色を楽しんでいただけましたら幸いです。

(編集 上田)

かたりべ
No.128



2018年7月6日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351
URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan>